様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　７ 年　 ６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３１３０３
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2021～2024
課題番号：２１Ｈ０１５１０・２３Ｋ２０９９２

研究課題名（和文）聖祠の配置から解明する東南アジアの多層的都市文化の漸層性に関する研究

研究課題名（英文）A study on the gradual layering of urban culture in Southeast Asia through analyzing the urban disposition and distribution of small ritual facilities

研究代表者
竹内　泰（Takeuchi, Yasushi）

東北工業大学・建築学部・研究員

研究者番号：３０５５３８６２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,400,000円

研究成果の概要（和文）：本課題では、2021～2024年度までの研究期間中、沖縄、台湾、中国東南部（福建省南部から広州市（珠江河口）周辺まで）、シンガポール、マレーシア、カンボジア、タイ、インドネシアまでの15の諸都市及びその周辺集落において聖祠の配置調査を行った。中国東南部においても、北沿岸部と南沿岸部、内陸部とでは聖祠の配置状況に違いがあることを本課題で明らかにした。それらの違いを継承しながら周辺国において独自の配置形式を生み出している状況をマレーシアのジョージタウン、カンボジアのプノンペンなどを事例に明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
中国東南部を中心に聖祠の配置の違いを調査によって明らかにした。中国東南部での聖祠の配置の違いを基に、東南アジアの文化的な漸層性、即ち周辺国へどのように影響が展開したかを読み解くための基盤構築に寄与した。

研究成果の概要（英文）：The research of urban distribution and disposition of small ritual facilities was conducted in 15 cities and their surrounding settlements in Southeast Asia. And this clarified that even in Southeast China from southern Fujian Province to the cities in the mouth of the Pearl River there are differences in the distribution of the small ritual facilities between the north coast, the south coast and the inland areas. This study contributed to the establishment of the foundation for analyzing the gradual layering of culture in Southeast Asia based on these differences in Southeast China.

研究分野：建築計画および都市計画関連

キーワード：聖祠　東南アジア　歴史的都市　漸層性　共通性　相違性　多層性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

本研究は､街路などに祀られている祠などの小さな宗教施設(本研究では総称して聖祠とする)の配置や分布を調査・分析することから、歴史的都市の空間特性を明らかにする研究である。

本課題では、東南アジア、特に中国東南地域を中心とした歴史的都市を対象として、聖祠の配置調査を行うものである。東南アジアの複数の歴史的都市のなかで、特に華人たちが形成した都市環境において､聖祠の配置や都市的分布を調査し､それら結果を相対化させ比較することから、東南アジア地域における各歴史都市を特徴づけている諸文化相互の影響の漸層性（グラデーション）の実態について検証することを目標としている。

２．研究の目的

東南アジアの歴史都市において、本課題の申請時に以下の４つの学術的問いを設定した。

問い①　どのような聖祠がどう配置され分布しているか。(種類や物理的な配置と分布状況)

問い②　聖祠はどのように維持され、都市生活でどう管理されてきたか。(社会的位置づけ)

問い③　聖祠の都市形成において、どのような空間的関与があったか。(都市計画との関係)

問い④　東南アジアの多層的都市文化の漸層性を、聖祠とその配置により如何に示せるか。(都市間相互の聖祠配置における共通性や相違性)

東南アジアの歴史都市における４つの問いを基に、各都市において、聖祠の物理的、社会的、空間的側面での相関を整理し、総合的に分析することで、東南アジア都市での文化的多層性とその漸層性について解明することを目標とした。

３．研究の方法

上記に示した問いに基づき、本課題では現地調査及びヒアリング調査を中心に行った。

現地調査では現地研究者との学術的交流及び学術的協力を得ながら行った。具体的には、マレーシアのジョージタウンでは、ペナン・ヘリテージ・トラスト理事の Clement Liang 氏に、ジョージタウンでの聖祠について、特に屋内の神棚における神像の配置と住民の出自の関係などについて詳解いただいた。また、澳門では王伯勛教授（澳門城市大学）にご協力いただき、澳門での聖祠と都市構造との関係、特に石敢當の特徴について情報提供をいただいた。広州地域での調査では、趙冲教授（福州大学（当時））から広州地域の地域構成について情報提供いただき、ドローンによる調査地域の撮影、住民へのヒアリングなどの協力もいただいた。

国内では、片岡樹教授（京都大学)、加納寛教授（愛知大学)、大田省一教授（京都工芸繊維大学）を招き、東南アジアでの聖祠について、文化人類学、東南アジア地域研究、建築学を横断する学術的交流会も行い、多面的な研究視点から当該課題の位置づけを検証した。

現地調査においては、コロナ感染症の影響から、国内外での移動が制限される状況が続いた。そのため、国内外での移動可能な対象国の選定、それらの渡航可否のタイミングを見計らいながら現地調査を行う必要があった。現地調査に必要なベースマップは、公開 GIS データを利用し調査用に調整して作成した。公開データがない場合は、Google（中国では Baidu）の衛星情報並びにドローンによる空撮データをもとに調査を行った。各地での住民へのヒアリングについては、分担研究者や現地研究者、現地出身の留学生、現地大学生の協力を得ながら行った。

４．研究成果

本課題を通じて、国際学会での発表を２本、国内学会での発表を５本行っている。これらの成果のうち、マレーシアのペナンにおける成果（”Study on the Small Ritual Facilities on the Common Space in Southeast Asia A Case Study of George Town in Penang, Malaysia”, Yasushi Takeuchi, Hon Shyan Chong, Yoshihisa Wakita, Liang Huang, Zhao Chong, The 14th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, 2024.09.12）の内容を中心に紹介し、並行して調査を行った中国東南部周辺諸国、中国広東省広州地域及び福建省の各都市での聖祠配置状況と対比し、東南アジアでの文化的な漸層性についての一旦の総括とする。

(1) 中国東南部での聖祠の基本的な配置構成

はじめに、中国東南部における聖祠の基本的な配置構成について述べておきたい。

中国東南部での聖祠は、家、地区、地域といった空間的な段階ごとに配置されている。これは古代中国の行政単位における段階的な考え方（基本単位として家があり、25 の家ごとに里や社が組織され、2500 の家ごとで州が形成される統治システム）とも関連している。中国では古代より基本的な単位である家には、5 つ場所（中霤、竈、井、門、戸）に神格が宿るとされ、現代に見られるものと照合すると、中霤は出入口正面の神棚の下に配される屋敷神、竈は炊事場に配される定福灶君、井戸がある場合は井に龍形の水神、門には、室内側から見て左側の上部に天官賜福、その下には門口土地財神が配される。戸には、門神が彫刻されることもあるが、多くは紙の門神像が貼られる。このうち、中霤の屋敷神や門の門口土地財神は、家の領域に関わる神格であり、地区ごとに配置される土地公（大伯公、福徳正神)、更には都市ごとに配される城隍廟と

いった領域に関わる聖祠の一連のつながりで捉えれば、その段階的な構成が理解されやすい。
　これら家に宿る 5 つの神格以外にも、出入口正面の神棚にはその住人が帰依する関帝や観音、媽祖、福徳正神（土地公）などより広く信仰される神格が祀られる。これらは地区を超えたより広い地域において廟や寺院にて祀られ、広汎に共通する信仰と家のつながりを形成している。
　また、神棚の脇には、両親や祖父母といった比較的近い故人の遺影が祀られる。家族の結束や祖先への敬意は、宗族が祀る祠堂において統合される。いかに遠い過去へ或いは遠くの故郷へと祖先を辿られるかは様々であり、祠堂として実体化されているか否かに関わらず、祖先への畏敬の念は、家に祀られる遺影などにより時間と空間を超えた祖先とのつながりを形成している。
　以上のように、中国東南部では、家と地区、家と地域における空間領域的な概念、より普遍的な信仰とつながっていく概念、そして家と祖先との血縁的つながりを重視する概念といった異なる概念が重なりながら、それぞれの概念と関連した聖祠を家の敷地から街路や広場などの共用空間へと配置し、個人或いは共同で維持管理していると捉えることができる。

（2）マレーシア ジョージタウンでの聖祠配置の特徴
　マレーシア・ペナン島にあるジョージタウンは、18 世紀末に英国による植民地として歴史が始まった。19 世紀初頭には約 12000 人の人口の半数以上がマレー人であったが、19 世紀末には約 5 万人超の人口となり約 74%が中国東南部からの移民であったとされる。福建系、広東系、潮州系、海南系、客家系の華人で主に構成され、出自毎の強い紐帯により社会生活が形成された。2008 年にはユネスコの世界遺産に登録される。調査範囲は世界遺産の分類によるコアゾーン、バッファーゾーンを含む範囲とした（図 1）。調査から 623 の聖祠が確認でき、分布状況を図 2 に示す。天官賜福が 479（76.9%）で最も多く、次に多いのは拿督公で 97（15.5%）であった。拿督公は、マレー半島の土着信仰の一種で、森や巨石など自然物に宿るとされ、領域に関連する神格であった。イスラム教化で神秘主義の影響を受け、更に移民華人により再解釈され、彼らの土地公信仰と混交したとされる。近隣諸国ではシンガポールやインドネシアのメダンなどでも確認できるが稀であり、拿督公が多く配置されている状況はジョージタウンの特徴と言える。
　調査範囲では門口土地財神は 9（1.4%）しか確認されておらず、門口土地財神を祀らないことが一つの形式となっている。今回は調査範囲外であったがバッファーゾーン外の低層集合住宅では各住戸前の廊下に門口土地財神を祀る様子が多く確認できたのとは対照的である。この差異の起因は明らかに出来ていないが、後述する中国東南部各地での調査も踏まえると居住者の出自によるものと推察できる。同じく、屋内の神棚に飾る神格の種類においても、居住者の出自により違いがあると言われている。具体的には、福建系であれば観音（又は大伯公）、広東系は関帝、潮州系は玄天大帝、海南系は媽祖、客家系は大伯公とされている。
　ユネスコ世界遺産が指定する区分から見ると、天官賜福はゾーンに関係なく約 77%前後の比率で一様な分布が確認できる。一方、拿督公はコアゾーンでは 29、バッファーゾーンでは 67 が確認でき、ゾーンにおいて配置傾向の違いが確認できる。
　また、都市形成過程からは、4 つ（Area Ⅰ～Ⅳ）に大分できる。Area Ⅰは 18 世紀の都市形成初期の街路形態を残し、Area Ⅱは 19 世紀に埋め立てられ、AreaⅢは 19 世紀末に福建省南部の海沿いの村々からの移民による水上住居、AreaⅣは、第二次大戦の復興事業として 1960 年代に新しく埋め立てられた。この区分に従えば、天官賜福は Area Ⅰ、Ⅱにおいて主要街路に面して同じ向きに配置されていることが確認できる。この範囲にはアーケード付きのショップハウスが連坦し、ほぼ全ての天官賜福は、正面出入口を出た（室内側から見た）左側の柱上部、出入口の軸と直行方向に配置されている。この配置は当該範囲全体の厳格な形式となっている。AreaⅢでは主動線である桟橋に対し住居が立ち並び、アーケードはないが多くが Area Ⅰ、Ⅱでの形式に従い自立式の天官賜福が同方向に配置されている。アーケードの有無の違いはあるが配置形式としては同じと言える。また、拿督公は、Area Ⅰ、Ⅱでは街区の内側の裏通りに配置され、Area Ⅲでは水上住居の裏手の埋立て地に配置されているこれらから、Area Ⅰ～Ⅲにおいて、都市形成過程は異なるが、聖祠の配置は、基本的に同じ配置形式に従っていると言える。
　一方、AreaⅣでは、中央部は工事中の再開発地、北側は高層の公共住宅団地であり、その周辺には低層のテラスハウス型の公共団地が一部あるが、多くが低層木造戸建て住宅であり細い網目状の通路でつながりながら密集し展開している。ここでは天官賜福は出入口の室内から見て

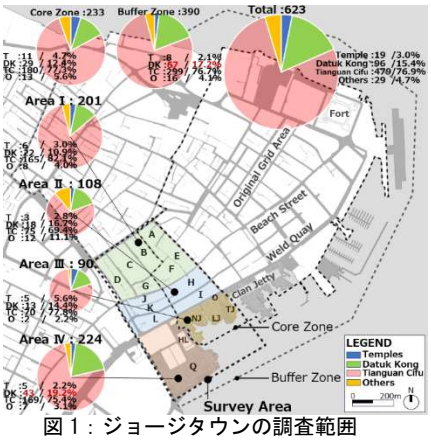

図 1：ジョージタウンの調査範囲

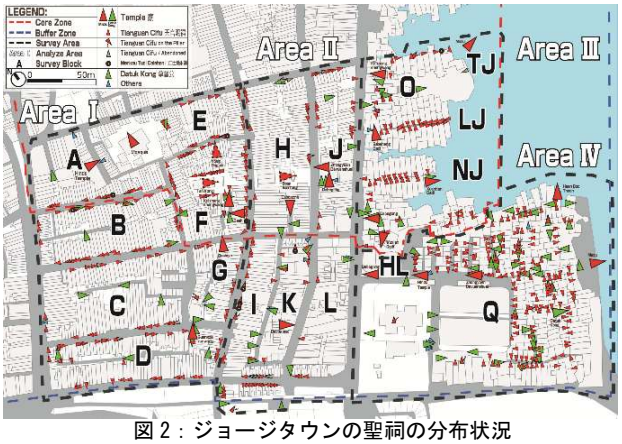

図 2：ジョージタウンの聖祠の分布状況

左脇に配置される傾向はあるが、壁に掛けられたものや自立型のものなどの多種があり、AreaⅠ～Ⅲにある配置形式は崩れている。拿督公も AreaⅠ～Ⅲでの配置形式とは異なり、個人の敷地内に祠が配置され個人により管理されているものもあれば、通路内に置かれ近隣の人々も祀ることのできるようなもの、更には広場状の空地に小さな廟として配置されるもの（途中には道標も設置され、この地区以外の人々にも開かれているもの）も確認でき、家の敷地内、地区、地域といった段階的な配置となっており、拿督公が土地公に近い存在として扱われている。

出自と生業が密接にかかわっていたジョージタウンでは、聖祠の配置においても、基本の配置形式に倣う傾向が AreaⅠ～Ⅲでは確認できる一方、戦後に形成された多様な出自の住民が混住する AreaⅣでは配置形式は必ずしも維持されず、中間的な存在の拿督公が必要に応じて配置され、土地公のような存在へと適用させ空間を調停することで新たな住環境が創造されていると捉えることができる。何れのエリアでも聖祠の段階的な配置形式を維持することが、ジョージタウンでの聖祠の配置の特徴と言える。

（3）中国東南部（広州市（珠江河口）周辺・広東省東部から福建省南部）での聖祠配置の特徴

① 広州市（珠江河口）周辺での聖祠配置

広東地方においては、香港、澳門、広州市を対象とした。何れも異なる社会背景を持ちながら、地理的には珠江を中心に約 90ｋｍという比較的近距離にあり文化的には近かったと考えられる。具体的には、香港ではランタオ島西端の大澳という漁村、澳門では聖アントニオ教会より西側エリアを範囲とし、広州市では広州市南部、番禺区石楼鎮赤崗村の旧市街を対象とした。

香港大澳村は河口の漁村で、中心部の町屋が連なるエリアでは門口土地財神が最も多く確認され、天官賜福も見られるが多くはない。地区ごとに地区の端に土地公が祀られ、村の中央には関帝廟と媽祖廟が祀られ、典型的な段階的配置構成となっている。聖祠の総数は 188 が計上でき、門口土地財神が 118（63%）を占め、札だけでなく、祠に入れ祀られるものも確認できた。また、漁師が多く住むエリアでは「石（Shi）」と呼ばれる自然石が戸口に祀られ、53（28%）が計上された。それらのほとんどが沖或いは川上に向いて祀られている。ヒアリングでは明らかにはならなかったが、漁に関わる門口土地財神に近い信仰だと考えられる。杭上住居（棚屋）エリアでは門口土地財神は確認できなかった。ヒアリングでは土地を持たないため、或いは先祖が決めたことなどの回答があり、門口土地財神が土地の所有と関連していることがわかる（図 3）。

澳門では 1277 の聖祠を確認した。うち 1231（96%）が門口土地財神であり、土地公などの祠が 33（2.5%）あった。天官賜福は 411 確認され、うち 405 が門口土地財神とセットで祀られており、単独で祀られるのは 6 件のみであった。澳門では石敢當が比較的多く見られるが、調査範囲内においては、石敢當のみで配置されている事例が 7（0.5%）、門口土地財神と併置されているものも 4 つ確認されている。調査対象外ではあるが、石敢當の廟も存在する。澳門では門口土地財神の配置を基本としながら、石敢當が単独で祀られるだけでなく、廟に祀られる場合や門口土地財神と併記される場合など柔軟な祀られ方をしていることが特徴となっている。

赤崗村では 289 の聖祠を確認した。うち 273（94%）が門口土地財神であり、天官賜福は 36 確認され、門口土地財神と併せて祀られるものは 34、単独で祀られるものは 2 件のみである。石敢當は澳門のように門口土地財神と併置されるものはなく、単独で設置されているものが 9 件確認できた。赤崗村での門口土地財神の祀られ方には他地域にない特徴がある。門口土地財神は戸口の足元に祀られるのが一般的であるが、赤崗村では膝より少し高い位置、或いは腰、や胸の位置に祀られることがあり、天官賜福に近い扱いのものもある。また、形態的には、必ずしも札を設置せず、3 本の香を立てることができる穴が穿たれた石のみが設置されている場合もある。札と当該の石が併置されている場合もある。今回はこれらを含め門口土地財神として扱った。札に彫られた名称においても、門口土地財神だけでなく、門口土地福神、門口土地福徳正神、門口土地福神などの種類があり、福徳正神すなわち土地公との関連が強い信仰であること、更にはその名称が組み合わせにより多様化している実態が看取でき、当該地域では名称も概念も祀る位置においても曖昧な形式の下、振幅をもって受容されていることが特徴となっている。

以上、珠江河口の都市や村では、戸口において、基本的に門口土地財神を祀り、付随的に天官賜福を祀る形式が共通している。これは、天官賜福を主とし、門口土地財神は必ずしも祀らないジョージタウンでの配置形式とは異なっている。また、形状、位置、併置の有無、石敢當との関係や扱いにおいても、この比較的近距離にあるにもかかわらず、相互に異なることが明らかになった。この相違が、どのように生じたのかについては、さらなる詳細な調査が必要である。

② 広東省東部から福建省南部での聖祠配置

前述の珠江河口地域のほかに、広東省東部の潮州市と梅州市、福建省南部の漳州市、厦門市、龍岩市の各都市及びその周辺集落においても横断的に調査し聖祠の配置状況を概観している。

潮州では、旧市街及び南部の龍湖村を調査した。戸口には門口土地財神も天官賜福も確認できず、戸脇に線香の焚跡がみられる程度であり、ジョージタウンや珠江河口周辺とは全く異なる。

梅州では、梅州中心街と周辺の村を調査した。市内、特に周辺の村では、積極的な保存は行われていないが、客家式住居、客家の墓や祠堂が今も維持されているのが散見できた。市内の戸口には潮州と同じく門口土地財神も天官賜福も明確には祀られておらず、稀に戸脇（内側から見て左側）に線香立てがみられる程度であった。また、周辺の村では門脇（同じく左側）に線香立てがみられたが、ヒアリングでは「天地」と呼ばれ、毎月 1 日と 15 日に祀るとのことであった。

漳州では、旧市街を調査したが、表通りは修景されており、店舗やアーケードには祀られるも

のがなく、表通りから外れた路地に形成される里（地区の単位）のなかの住戸において、戸口脇に線香立てがみられる程度であった。
厦門では市内及び周辺集落を調査した。市内では、同じく戸口での祀りは見られないが、周辺集落では、線香立てが稀に確認できた。但し、ヒアリングによると周辺が古戦地であったため、その際に亡くなった人々の霊にむけて（辟邪として）祀っているとのことであった。
龍岩市では市内および周辺の土塁住居群を調査した。市内では客家式住居や祠堂が梅州と同様に散見できる。風水により、住宅の出入口が街路に沿った向きに開かれず、ずれた戸口が連続する街路の様子も梅州に近い。戸口での聖祠の祭礼はほとんど確認できない。土塁群でも土塁入口、土塁内各住戸口には祭礼が確認できなかった。土塁外の住居では、戸口に線香立てがあり、梅州と同じく「天地」と呼ばれ毎月 1 日と 15 日に線香、足元で火が焚かれる。3 年に 1 回、漳州の保生大帝を祀る寺院に参拝し、その際には戸口に保生大帝の旗を掲げるとのことであった。
以上、広東省東部から福建省南部では、いずれにおいても、明確に門口土地財神や天官賜福といった名称を掲げて戸口を祀ることは行われていないことが明らかになった。更には、沿岸部である潮州市、漳州市、厦門市では、稀に戸脇に線香を焚くのが確認できる程度であるのに対し、内陸地である梅州市と龍岩市では市内においては客家式住居や祠堂が残り、その他の住居にも出入口の向きなど風水の概念が反映されている様子が共通して見られた。また、それら周辺の村では、戸脇で線香を焚くのを「天地」と呼び共通していることも明らかになった。沿岸部と内陸部（客家）とでは、戸口の祭礼に違いがあることが分かった。
中国東南部での横断的な調査から、珠江河口周辺部と、広東省東部から福建省南部とでは戸口での聖祠の有無やその種類、祭礼状況に大きく違いがあることが明らかになった。珠江河口周辺部という比較的近距離の関係にあっても、それぞれに聖祠の配置形式や形態、表記、種類などにおいて差異があることが明らかになった。また、広東省東部から福建省南部においても、沿岸部と内陸部では、戸口での聖祠配置状況の違いや呼び方の違いがあることが明らかになった。

（4）その他の地域での聖祠配置の特徴
その他の地域では、沖縄、カンボジア、タイ、台湾において聖祠配置の調査を行っている。
沖縄においては、那覇市壺屋地区での石敢當の配置変化の分析を行った。現代の沖縄では中国東南部や東南アジアとは比較にならないほど多くの石敢當が配置され、161 の石敢當を確認し、2004 年の先行研究との比較から増加傾向が確認できた。戦後の本土返還以降、沖縄文化の自覚と再評価などから、石敢當が日常生活に柔軟に取り入れられている様子を確認し報告した。
カンボジアでは、首都プノンペンのセントラルマーケットの南側にある華人ショップハウス地区での調査と分析報告を行った。当該地区は 1975 年のクメールルージュ占領により一旦無人化し、ベトナム軍の占領を経て 1979 年に解放され多様な出自の人々の混住が一気にすすんだ地区である。聖祠の配置においては、道教由来のものやクメール文化由来のものなどが同じ家に混在している状況を確認した。中国東南部の聖祠と共通するものは屋内ではチョム・ニァム・プテア（Chom Neang Pteas　屋内正面の神棚下に祀られる屋敷神）とチョム・ニァム・ドンタ（Chom Neang Donta　神棚脇の祖先壇）、屋外ではリアン・テヴァダ（Rean Tevada　戸口の天官賜福）があり、呼び名はクメール語であるが、表記は漢字で表記されている。また、リアン・テヴァダには、タイの土地神の聖祠、サーン・プラプーム（Saan Phraphuum）と同じ形態のものもあり、天官賜福型のものと同じとして扱われている。その他、屋内にはクル・バ・ティエ（Kru Bat Tyeay 前世の生き物を祀る）や屋外にはマレン・コンビル（Marenh Kongveal　道にいる子供の霊を祀る）が配置されているのが概ねの基本形式となっており、それ以外にも死んだ叔母を祀るものや死んだ祖母を祀るものなど母系の霊に関連するものが屋内に配置される。これらの聖祠と住民の具体的な出自との関連を今後明らかにし、関連を結び付けていく課題があるが、中国東南部の影響が色濃く引き継がれつつ土着化している様子が捉えられつつある。
タイにおいても、バンコク タナコーシン地区を中心とした 5 つの地域での土地神サーン・プラプームの配置、形態、祠内の神体の調査が行われており、都市空間の変化に伴ってどのような配置や形態に変化が表れるかについて精査を行っている。また、公共の住宅団地での土地神の配置や管理状況などについて、チェンマイにおける聖祠の情報共有が行われた。
台湾では、主に台南を調査した。市内には寺院や廟が多く分布するが、住戸の戸口には基本的に門口土地財神や天官賜福といった聖祠は確認できなかった。台湾海峡対岸の福建省からの移民が多く、厦門や漳州の状況に近いとも考えられるが、清代だけでなく、第二次世界大戦以の政情による移民も多いため、地理的な背景だけで理由づけられず、更なる調査が必要である。その他の聖祠としては、寺院入口に寺院を守護する五営という祠が置かれることがあるが、五営が寺院の影響するエリアの境界に分散配置されている事例も確認できた。また、無縁の死者を祀る有応公祠も複数確認できた。それらのうち、道路拡張によって路地に移設された事例も確認した。

（5）今後の課題
地域住民の属性や出自などを精査する文化人類学的アプローチや、近現代における各国での宗教政策の検証も重ねて分析することが、聖祠の配置における地域間での相違性をより立体的に分析するためには求められ、今後の研究課題となった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 竹内泰
２．発表標題 沖縄県那覇市壺屋地区における石敢當の配置変化　東南アジアの聖祠研究　その1
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 田中佳穂
２．発表標題 プノンペン（カンボジア）の外部空間における信仰関連物の配置　東南アジアの聖祠研究 その2
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 小原大弥
２．発表標題 プノンペン（カンボジア）の住居空間における信仰関連物の配置　東南アジアの聖祠研究　その3
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2023年

１．発表者名 竹内泰
２．発表標題 香港大澳における聖祠の分布特性　東南アジアの聖祠研究 その4
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 秋山楓斗
２．発表標題 プノンペン（カンボジア）旧市街地区の住居空間にみられる聖祠の配置に関する研究 東南アジアの聖祠研究 その5
３．学会等名 日本建築学会
４．発表年 2024年

１．発表者名 Yasushi Takeuchi
２．発表標題 Study on the Small Ritual Facilities on the Common Space in Southeast Asia, A Case Study of George Town in Penang, Malaysia
３．学会等名 The 14th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 Futo Akiyama
２．発表標題 A study on the placement and semantics of religious objects in the residences and exterior space in Phnom Penh, Cambodia
３．学会等名 The 14th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia（国際学会）
４．発表年 2024年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	脇田　祥尚 (Wakita Yoshihisa) (40280119)	近畿大学・建築学部・教授 (34419)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	田代　亜紀子 (Tashiro Akiko) (50443148)	北海道大学・メディア・コミュニケーション研究院・准教授 (10101)	
研究分担者	張　漢賢 (Chong Hon Shyan) (80341064)	公立鳥取環境大学・環境学部・教授 (25101)	
研究分担者	魚谷　繁礼 (Uoya Shigenori) (80601450)	京都工芸繊維大学・KYOTO Design Lab・特任教授 (14303)	
研究分担者	政木　哲也 (Masaki Tetsuya) (30796264)	京都橘大学・工学部・専任講師 (34309)	
研究分担者	田中　麻里 (Tanaka Mari) (10302449)	群馬大学・共同教育学部・教授 (12301)	
研究分担者	白石　英巨 (Shiraishi Hideo) (00943599)	金沢大学・地域創造学系・講師 (13301)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関